

借金
を背負う俺は

二人の勇者に捨てられて

二本の伝説の剣で弄ばれる



俺は名だたる凄腕の剣士ながらギャンブル狂。

多額の借金をして、常にトラブルに見舞われるから、そりゃあパーティーに加入させてもらえず。

収入がないくせにギャンブルをやめれないから泥沼に。

とうとう首が回らなくなり「こうなったら体で払ってもらうしかないな」と宣告されたそのとき。

待ったをかけて借金の肩代わりをしてくれたのが二人の勇者だ。

そう、この世には魔王を打倒すべく勇者は二人いる。

聞いた話、伝説の剣も二本あり、別々の場所にあったそれを同時に引きぬき、お互いの存在を知ってから協力して旅をしているとか。

一人は色白の爽やかな優男、一人は色黒の野性味のある強面。

あだ名は白勇者、黒勇者で、オセロのように対照的な性格をしながらも二人とも男前だからモテるといふ。

噂通り「これからの厳しい戦いにはきみの剣の腕が必要だ」と紳士的に手を差し伸べた白勇者に対し「一生の恩だと思えよ。奴隷のようにこき使ってやる」と傲然と鼻で笑う黒勇者。

息のあったいいコンビで、意外と接しやすかったし、ほかの仲間も歓迎してくれ、パーティーでの居心地はわるくなかったのだが。

広大な森をひたすら歩く道中、ギャンブルをしたくてもできず。

日中は戦闘をしたり忙しくて、あまり意識しないのが、夜は体をかきむしりたくなるほど耐えられなくて。

気を紛らわすために森の開けた場所で剣の鍛練を。

熱い筋肉を震わせて闇を切るように剣を振るっていたら「精がでますね」「遊んでぶちのめしてやるよ」と二人の勇者が登場。

戦闘で二人が伝説の剣をふるうと衝撃波が放たれる。

剣に宿る神の力によるもので、ほとんど衝撃波で倒すから、直接的な攻撃はしない。

つまり剣と剣を交える経験がすくなく、熟練の剣士の俺に敵うはずがないわけ。

「二人でこい」と挑発したところで、易々とあしらってみせる。

借金を肩代わりしてもらったに、ふだんは頭があがらないから、ここぞとばかりに嘲弄。

が、すこし油断したようで、むきになった黒勇者が足で砂をかけて目眩まし。

「ぐう！」と瞼を閉じた隙をつかれてタツクルされ、地面に背中を打ちつけたなら喉元に剣の切っ先が。
ため息をつき「参ったよ」と顔をあげてぎよつとする。

剣を向けて佇む勇者二人が顔を真っ赤にし呼吸を乱して目を充血させていたから。

「これじゃまるで・・・」とふと視線をさげれば、ズボンがもっこり。

すらりとした二人の体型に見合わない、小さい魔物がくつついている
ような巨根。

目を見張っているうちに、白勇者が剣でシャツを切って胸を露にし、
黒勇者が剣の平たいところを股間に撫でつける。